

博士論文要旨

論文題名 明治前期における出生届制度および死亡届制度 の成立・展開過程に関する研究 — 住民はいかにして把握されたか —

立命館大学大学院政策科学研究科

政策科学専攻博士後期課程

ホリイ ケイコ

堀池 航洋

本論文は、日本における住民把握制度の成立と展開に関する行政史研究であり、その課題は、明治前期の出生届制度および死亡届制度がどのような成立・展開過程を経たかを、住民把握の観点から説明することである。

日本における住民把握制度の成立と展開についてはこれまであまり研究が蓄積されておらず、研究上の道具立ても十分でない。そこで第1章では、先行研究から知見と課題を抽出するとともに、本論文の理論的位置づけを明確にする作業を行う。まず、近代化にともなう住民把握の成立と発展に関する先行研究の整理を通じ、住民把握の基本形が情報の収集・管理・利用により構成されること、そして、近代的住民把握の特性が把握の悉皆性、情報の個人性、把握の画一性、および情報提供の自発性であることが示される。続けて、次に住民把握の観点から行われた従前の戸籍制度研究の検討を通じ、戸籍制度においては情報の収集にあたる届出制度が特に重要な役割を担うにもかかわらず、これまで十分に検討されていないという課題が残されていることが明らかとなる。

それらを踏まえ、事実と公的記録とのあいだの乖離という住民把握の原理的課題と、住民による正確な届け出の確保という実践的課題が、切り離しがたく結びついていることを確認したうえで、本論文における問いを次のように設定する。すなわち、明治前期の戸籍制度において、いかにして情報収集がなされたのかである。そして、届出制度が収集する情報の正確性、つまり、事実と公的記録とのあいだの乖離の最小化へと向かう動機に影響を及ぼす要因として、正確な届け出に関する政府と住民の合理的行動にかかる誘因、および、誘因が作動する環境としての社会的旧慣を、本論文の分析視角として設定する。

第2章では、明治期の戸籍制度の成立と展開およびかかる背景とそれと並行して整備される地方制度の変遷について戸長を基軸として整理し、戸籍行政を担う側の力量の変化が、

制度運用と収集される住民情報の正確性に及ぼした影響を検討した。そこでは、戸籍制度の最前線においてその運用を担った戸長の位置づけと性格が官僚性の強いものへと変化していくことにともない、しだいに戸籍に関する従前の事務経験などの社会的旧慣の影響が薄れ、明治中期にかけて戸長の事務処理能力が高められていくことで、戸長が扱う戸籍事務処理の厳正も高められていった経緯が明らかとなる。

第3章および第4章において、明治前期の届出制度の事例として死亡届制度と出生届制度について検討する。第3章では、死亡届制度の成立と展開過程を検討する。これを通じ、明治前期において死亡届制度がいかんにして住民の死亡情報を収集し得たのかを明らかにする。まず、当時の社会的状況として伝染病の流行にともなう公衆衛生上の要請から死亡情報の重要性が高まる一方で、伝染病への強硬的な衛生施策への反動により死亡情報の秘匿・虚偽もまた促進されていたことを確認する。そのうえで、そうした衛生からの忌避行動は、住民の合理的行動の一つとして位置づけられるものであったことを示す。それに対し明治政府は社会的旧慣としての穢観念にまつわる住民の合理的行動を埋火葬に関する手続きと紐づけることにより、穢を死亡の届け出の誘因として利用し、正確な届け出を確保するに至る。

そして第4章では、事例を同時期の出生届制度へと移す。まず、出生届制度においては当初から届け出の虚偽や遅滞という問題が発生していたことを確認し、それが戸籍情報の信頼性を低下させることで出生届制度は情報収集としての機能を十分に果たせずにいたことを示す。それを踏まえ、出生届制度の成立と展開過程についての検討を通じ、出生届制度がなぜ住民の出生情報を収集し得えなかったのかを明らかにする。そこでは、当該時期においては不正確な出生の届け出をもたらし社会的旧慣が広く残存しており、それが問題視されていたものの、一方で、政府において死亡情報に比べると出生情報の重要性が低く認識されていたことなどによって届け出にもとづく出生情報の正確性を高める政府側の誘因が弱く、また誘因に利用しうる旧慣が見出しがたく、誘因効果をあげうる制度的措置が困難であった。他方で、住民側についても旧慣にもとづく行動を是正し正確な届け出を行うことへの合理的な誘因が欠如していた。そのために、情報の不正確さを認識しつつも現状維持的に制度が運用されていたことが明らかとなる。

以上の検討を踏まえ、本論文の課題に照らして以下の点が結論として示される。すなわち、明治前期の死亡届制度の展開過程においては届け出に際し住民が単純な合理的計算を動機にしたのではなく、社会的旧慣との連動が誘因効果を生じさせたこと、他方で、出生届制度の展開過程では誘因と連動しうる社会的旧慣を見出せなかったために、誘因効果をあげうる制度的措置がとれなかった。また、本論文の研究結果を踏まえ、誘因効果の作動が届出制度の成否を決するが、届け出に関する誘因がどの程度効果を発揮するかは、社会的旧慣と誘因との連動の有無およびその成否に規定されるため、誘因が作動する住民の行為空間の環境分析が史的に行われなければならないことが示される。

Abstract of Doctoral Dissertation

Title Identifying the Resident's Birth and Death
in the Family Register System
:Establishment and Development Process of the Notification System
in the Early Meiji Period

Doctoral Program in Policy Science
Graduate School of Policy Science
Ritsumeikan University
ホリイ ケーコ
HORIIKE Koyo

This dissertation is an administrative history study on the establishment and development of the identification system in Japan. And the purpose is to examine the process of establishment and development of the notification system in the early Meiji period from the viewpoint of identification.

There have not been much previous studies on the establishment and development of the system of identification in Japan. Therefore, in Chapter 1, the theoretical position of this dissertation has to be clarified by extracting findings from broad previous studies on identification. By examining previous studies on the establishment and development of identification system in the modernization, as well as studies of the family register system, it become clear that the missing link of the notification system, which plays an important role in the family register system, has not been sufficiently examined. In the light of this discussion, it is presented that the issue in principle, which is to agree the fact with official records, and the issue in practical, which is ensure the accurate notification by residents.

Based on these, two analytical perspectives of this dissertation are presented : the government's and residents' incentives for rational behavior regarding notification, and the old social conventions as the environment in which the incentives operate. And the research question is following: “how the information of residents was collected in the

family register system in the early Meiji period”.

Chapter 2 presents an overview of the establishment and development of the family register system and changes in the local system during the Meiji period, with a focus on family register heads (Ko-cho), to show the impact of changes in the competence of those in charge of family register administration on the accuracy of resident information. As a result, it is clear that the strictness with which family heads handled family registry paperwork increased as their administrative skills improved over the course of the mid-Meiji period.

In Chapter 3 and 4, two case study focusing on notification system are conducted. Chapter 3 focuses on the death notification system. It will clarify how the death notification system was able to collect information on the deaths of residents in the early Meiji period. The Meiji government used impurity (Kegare) of death as an inducement to notify deaths, thus ensuring accurate reporting. Chapter 4 focuses on the birth notification system. It is proved that the government's incentives to increase the accuracy of birth information by the notification were weak, and that it was difficult to find reasonable incentives for residents to notify births accurately, making it difficult to create institutional measures that would have an incentive effect.

Finally, the conclusions of this dissertation are presented. The results of this study are summarized in the following. First, the success or failure of a notification system depends on the operation of the incentive effect. Second, the effectiveness of the incentive in the notification system is determined by the linkage between old social conventions and the incentive. Therefore, third, a historical analysis of the environment of the residents' behavioral space in which the incentive operates must be conducted.